彦根市松原内湖遺跡の縄文時代の再検討

ー琵琶湖岸における集落動向の一例ー

小　島　孝　修

１．はじめに

彦根市に所在する松原内湖遺跡では、これまでに滋賀県東北部浄化センターの建設・増設工事および国道８号バイパス建設工事に伴って、複数次の発掘調査が実施されている。前者の成果については、すでに数冊の発掘調査報告書が刊行され、各時代の多くの遺構・遺物が報告されている。縄文時代の遺構・遺物も数多く検出されていて、質・量ともに充実している。本遺跡は、滋賀県を代表する縄文時代遺跡の１つといえる。

しかしながら、調査報告書における記述・検討が不十分なことや、複数の報告書に分かれて報告されていることなどが原因となって、豊富な資料群が存在する割には、残念ながらその内容の評価が妥当になされているとはいいがたい状況にあると考えている。

このことを踏まえ、本稿では、すでに報告されている県東北部浄化センターの建設・増設工事に伴う発掘調査の成果を精査して時期ごとにまとめ、その内容を再検討することを第１の目的とする。さらに、周囲に立地する縄文時代遺跡との比較、あるいはそれらを総括して地域としての位置づけを行い、当該地域がどのように縄文時代に利用されていたのかについて考えることも目的の１つである。また、本稿のもう１つの目的は、現在実施している国道８号バイパス建設工事に伴う発掘調査の整理作業において、縄文時代資料の位置づけを円滑に行う準備をすることである。

２．松原内湖遺跡とその調査の概要

(1) 松原内湖遺跡の概要

松原内湖遺跡が所在する彦根市は、滋賀県東部の湖東地域に位置し、人口は約11万３千人を数える（図１）。市域の北東部にその中心となる市街地があり、江戸幕府重臣井伊家が代々居城とした彦根城（天守は国宝に指定）があることでよく知られている。遺跡名の由来となっている松原内湖は、琵琶湖と砂帯で隔てられつつ狭い水路でつながる内湖の１つである。彦根城の北東側に広がっていて、彦根城の外外堀とつながっている。また、彦根藩の主要な港である「彦根三湊」の１つである松原湊（現在の彦根港）が、砂帯を横断する狭い水路に築かれた（あとの２つは長浜湊・米原湊）。なお、松原内湖は戦時中の食糧難に起因する農地造成を目的に、揚水により干拓されて陸地化し、その大半が戦後は水田として利用されてきた。近年は大規模な土壌改良を行って、宅地造成も一部で進んでいる。

松原内湖遺跡は、彦根市松原町に所在し、縄文時代から中世にかけての集落遺跡として周知されている（滋賀県教育委員会2017）。旧松原内湖がその東側の南北に連なる独立山塊・佐和山丘陵と接する一帯に立地し、中心は内湖東北岸の低湿地となる。また、松原町は彦根市最北部に位置して米原市と接しているが、この境界は古代における犬上郡と坂田郡の境界にほぼ重なっている。

周囲の琵琶湖岸近接地には、佐和山丘陵東側の六反田遺跡のほか、北側の米原市域旧入江内湖周辺の入江内湖遺跡や磯山城遺跡・筑摩佃遺跡などの縄文時代遺跡が分布する（図２、瀬口2000）。これらとの関連については後述する。

(2) 松原内湖遺跡における発掘調査の概要

松原内湖遺跡は、旧松原内湖の東北部で計画された県東北部浄化センターの建設に伴って、昭和59年（1984）度に行われた事前の試掘調査で新たに発見された。引き続き、発掘調査を昭和60年度～平成３年（1991）度に行ったが、これを第１次調査とする。この調査の整理作業は、平成２年度～同４年度に行われた。

第２次・第３次・第４次調査は、いずれも県東北部浄化センターの増設工事に伴って行われた。第２次調査は試掘調査を平成12年度に行い、発掘調査を平成12年度～同14年度に行い、整理調査を平成14年度～同16年度に行った。第３次調査は、試掘調査を平成17年度に行い、発掘調査を平成18年度～同20年度に行い、整理調査を平成19年度～同23年に行った。第４次調査は、発掘調査を平成24年度に行い、整理調査を平成25・26年度に行った。

これらの調査は、いずれも当協会が調査機関として実施したものであり、筆者自身は第３次調査の発掘調査と整理調査の一部を担当した。その主な成果は、内湖に臨む丘陵の谷間に営まれた、奈良時代～平安時代前期の集落と中世の集落の発見であったが、縄文時代の遺構・遺物も少ないながら検出した。筆者にとって、３年間と長期にわたって初めて担当した調査であり、経験上得られたものも多かった。また、その後に調査を担当した彦根市佐和山城跡や米原市入江内湖遺跡とともに、旧坂田郡・旧犬上郡境一帯についての思考を深めるきっかけとなった。このほかに、筆者は、第１次調査・第２次調査についても縄文時代遺物の整理調査を担当した。したがって、前述した、松原内湖遺跡の縄文時代資料の記述・検討が不十分であることの責務の多くは、筆者にあると考えている。

これらのうち、最も縄文時代の調査成果が多く、また十分に報告を行えていないのが第１次調査である。縄文時代資料の内容については、要約して表１にまとめた。

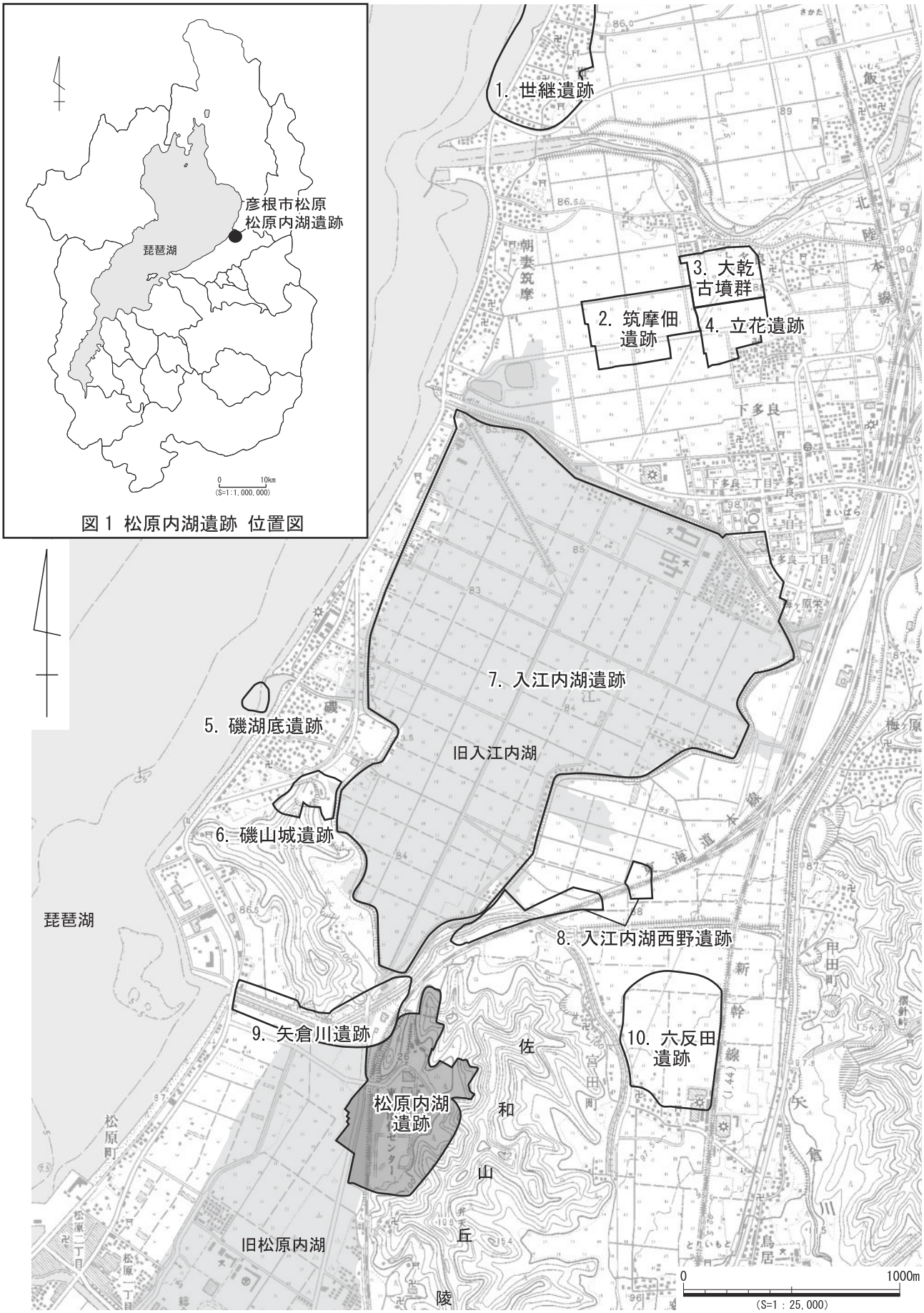


図 1 松原内湖遺跡 位置図

図 2 松原内湖遺跡位置および周辺縄文時代遺跡分布図
（ベースマップは国土地理院電子地図「彦根東部」）

図 3 松原内湖遺跡 調査区位置図
（ベースマップは陸軍陸地測量部明治 26 年発行「彦根」）

３．松原内湖遺跡各調査の内容（図３）

(1) 第１次調査の概要（図４）

第１次調査の成果として、２冊の調査報告書が刊行されている。うち１冊は古墳時代の木製品について報告されたもののため、本稿では扱わない（吉田ほか1992）。本稿では、それ以外の調査成果についてまとめられた（吉田・小島ほか1993）を対象とする。調査区は、遺跡範囲全域で行われた試掘調査の結果に基づいて20箇所が設定されたが、そのほとんどは遺跡範囲の北半部に位置している。

本報告書の持つ最大の問題点は、遺物の出土情報の記載がほとんどないこと、つまり遺物と遺構や遺物包含層との関連性が不明瞭なことである。特に、縄文土器については、調査年度しかわからない状況にある。石器についても、「計測表」は掲載されているが、そのうちの「トレンチ名」欄の記号が何を示すのか、本文や挿図図版からは読み取ることができない。遺物実測図の原図にそれぞれ当たれば、注記から詳しいデータは得られるとは思うが、その作業には改めて時間も要する。

したがって、本稿では、ひとまず本報告書から得られる情報のみを用いて検討する。実測・掲載された遺物は、土器は挿図図版69枚に586点、石器は同６枚に90点（180点出土中）、木製品（丸木舟）は同１枚に４点（10点出土中）である。個々の遺物の特徴についてはここではあまり掘り下げない。興味のある方は各報告書にあたられたい。

昭和60年度調査：JR琵琶湖線（東海道本線）東側の南北方向に連なる長さ約300ｍの小丘陵の南側に７調査区を設定していて、このうちＴ１（図３・表１の③、以下○数字はすべて同じ）、Ｔ２・Ｔ３（④）、Ｔ６（⑤）で縄文時代の遺構・遺物が検出されている。うち資料が多いのは、３層の遺物包含層や遺構（土坑）が検出されたＴ２・Ｔ３（④）である。土坑のうち、SK10の遺構実測図には晩期後半の凸帯文土器が認められることから、当該期の遺構と認識できる。

実測・掲載された縄文土器は、挿図図版12枚に195点である。うち158点が晩期後半：凸帯文土器と弥生前期古段階のものである。これらは、第３層：礫混黒褐色腐植土と第４層：砂混茶褐色腐植土からおもに出土したと考えられる。それ以前では、中期前葉２点、中期後葉～後期前葉・同中葉15点、後期後葉11点であり、無文土器の大半は、後期の所産と思われる。これらの土器は第５層：茶褐色腐植土からも出土したと考えられる。

このほか、10点の石器が出土しているが、ほとんどがＴ２・Ｔ３から出土している。磨製石斧が６点と比較的多い。また、本文に記述はないが、挿図図版には丸木舟３艘が図示されていることから、これらがいずれかの遺物包含層から出土したと考えらえる。ただし、現状では丸木舟の所属時期は、後期～晩期としかとらえられない。

昭和61年度調査：３調査区を設定しているが、このうち縄文時代の遺構・遺物が出土しているのはＴ１（⑧）のみである。土器棺墓など、比較的多くの遺構が検出されている。

実測・掲載された縄文土器は、挿図図版26枚に191点である。早期後葉～前期前葉が５点、中期中葉が８点、中期後葉～後期前葉が20点、晩期後半の凸帯文土器が４点認められるが、そのほかの約150点はいずれも後期中葉～後葉、土器型式でいえば北白川上層式３期・元住吉山式・宮滝式と考えられる。本文では、遺物包含層からは後期中葉～晩期前葉の縄文土器が多く出土したとしているが、掲載資料中には明確に後期末～晩期初頭の滋賀里Ⅰ・Ⅱ式土器と認識できるものは見当たらない。したがって、遺物包含層の主体をなすのは後期中葉～後葉の土器群とすることができる。ただし、少量の弥生土器を含むため、堆積時期を示すものではないと考えられる。

遺構では、晩期後半の土器棺墓６基と土壙墓の可能性がある土坑12基があり、当該期の墓域と考えることも可能である。ただし、晩期後半の凸帯文土器の遺物実測図は、４点しか掲載されていない。実測図では時期比定が困難な無文土器も組み合わせて土器棺墓としていた可能性もあるが、遺構図からはその判別は困難である。

石器では、実測・掲載総数の２／３にあたる60点が本年度調査で出土していて、計測表のトレンチ名・層位等の記述からは、さらにそのほとんどがＴ１の遺物包含層からの出土と推測される。石鏃や石匙・石錐といったサヌカイトやチャートなどを素材とする剥片石器は、実測・掲載された25点がいずれもＴ１遺物包含層から出土したものと考えられるし、実測・掲載された石錘も34点中29点がＴ１遺物包含層から出土したと考えられる。このほか、文様を持つ有頭石棒１点も出土している。形状などから、後期・晩期の所産であろう。また、丸木舟３艘が出土している。

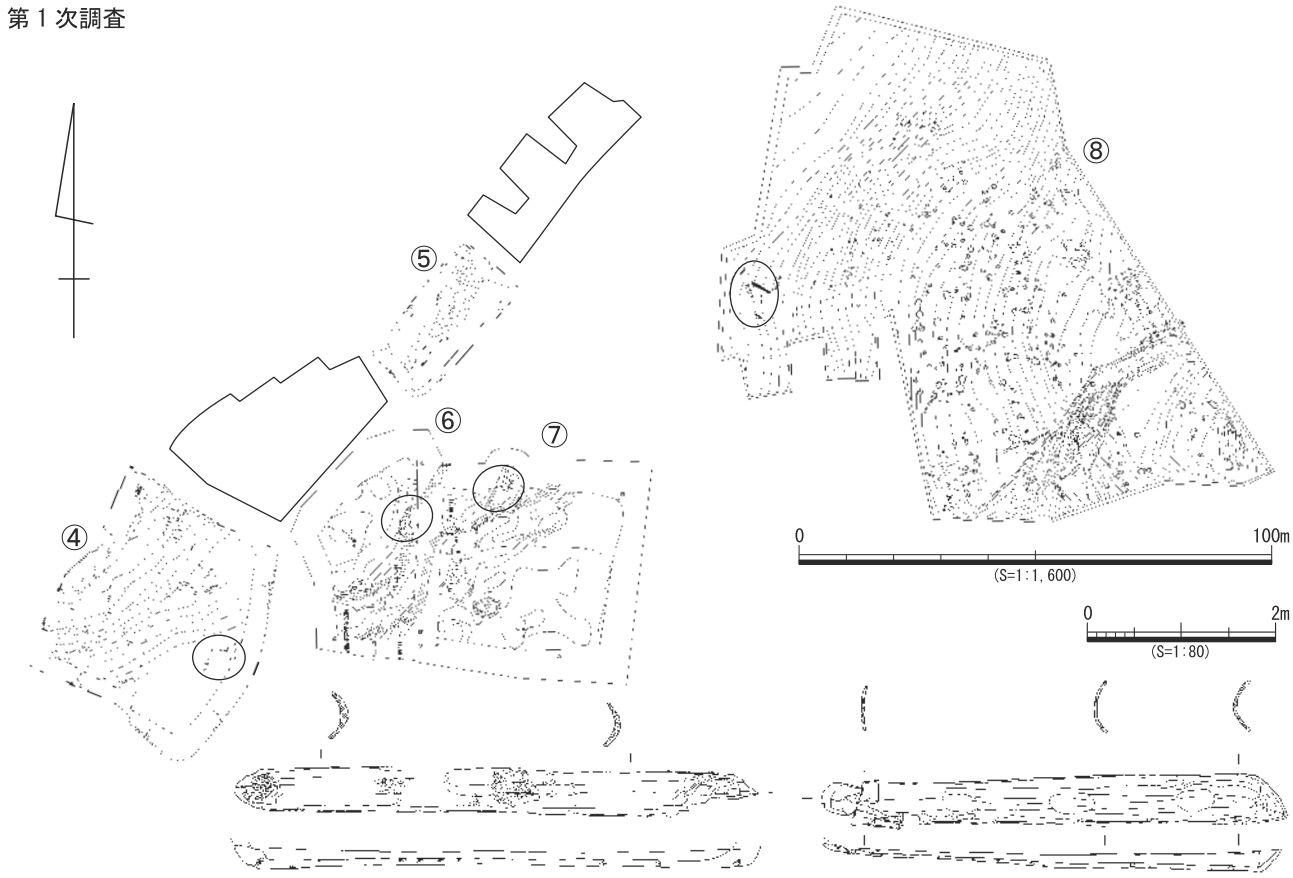
昭和62年度調査：８調査区を設定していて、このうちの７調査区は現在のJR琵琶湖線の西側、前述の小丘陵の西側にある。このうち、Ｔ２・Ｔ３（①）とＴ４（②）の隣接する２調査区で、灰色砂礫層から縄文時代遺物が出土している。

実測・掲載された縄文土器は挿図図版２枚に13点である。中期中葉・船元Ⅲ式のほかは、後期中葉・北白川上層式３期の深鉢２点や晩期後半・凸帯文土器４点などがある。

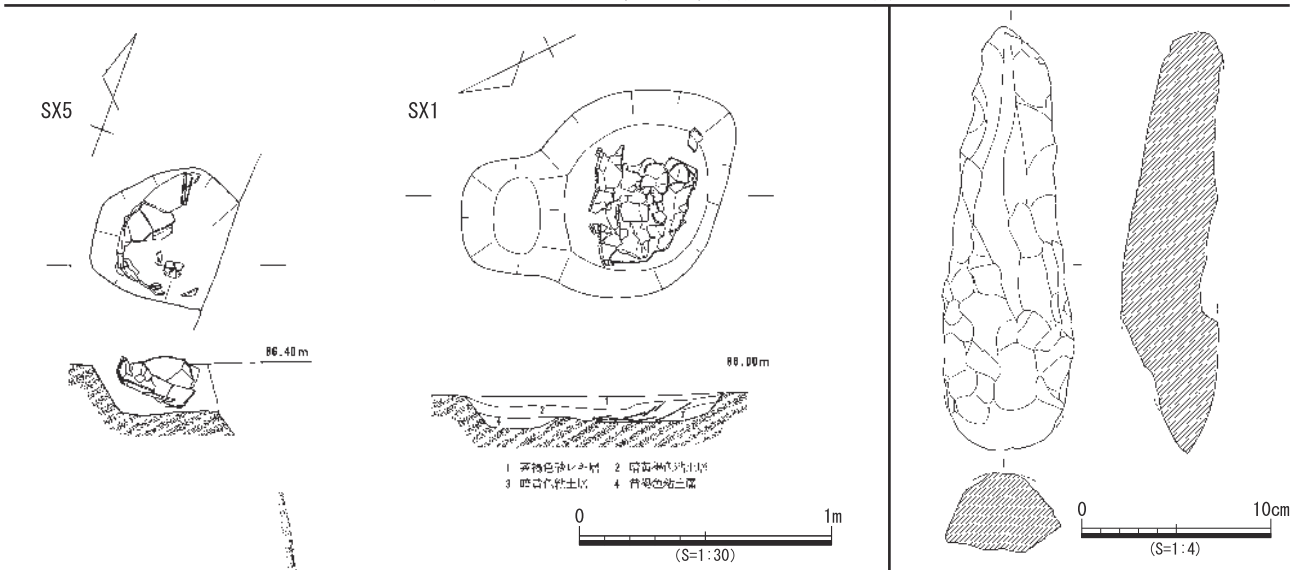
このほか、磨製石斧や石錘など６点の石器が出土しているが、このなかにいわゆる御子柴系石斧と呼ばれる局部磨製石斧が含まれる。長さ22.5㎝を測るものだが、報告書では「表面が剥離している」と記述していて、御子柴系石斧とは認識していない。本遺跡では、このほかにもう１点の御子柴系石斧が出土しているという（鈴木2010）。このほか、くびれをもって有頭状を呈する石棒もあり、出土土器の時期からも、後期・晩期の所産とできる。

平成２年度：昭和60年度調査区Ｔ２・Ｔ３（④）の東側に隣接する、より標高が低い地点に、調査区を設定している（⑥）。標高81.5～81.8ｍに厚さ５～20cmの灰色砂混茶褐色腐植土が堆積し、そこに後期中葉～後期後葉を主体とする

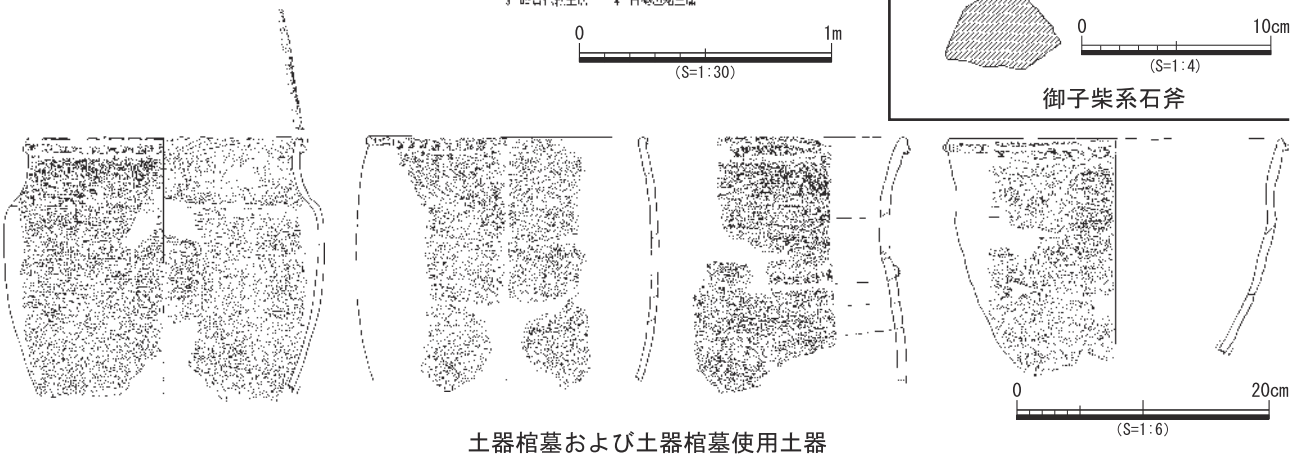
第１次調査



丸木舟出土地点（○で囲んだ箇所）および丸木舟



御子柴系石斧



土器棺墓および土器棺墓使用土器

図４ 松原内湖遺跡第１次調査における主な縄文時代の遺構・遺物

表 1. 松原内湖における縄文時代資料の内容

年度	調査区	各調査区の概要		図3
		遺構	各遺構の概要	
第1次調査				
S62	T2・3	標高82.7～83.0mに堆積する灰色砂礫が縄文時代遺物を包含。		①
	T4	標高83.7m前後に堆積する灰色砂礫が縄文時代遺物を包含。		②
S60	T1	茶褐色腐植土が縄文土器を包含。		③
	T2・3	第3層：礫混黒褐色腐植土・第4層：砂混茶褐色腐植土が晩期土器を包含、第5層：茶褐色腐植土が後期土器を包含する。ほか2艘の丸木舟を検出（後期・晩期）。		④
		SK6	埋土は礫混黒色粘質土、晩期土器が出土。	
		SK9	0.75m×0.65m・深さ0.30mの長方形土坑、埋土は暗茶褐色腐植土で縄文土器が出土。	
		SK10	1.15m×1.05m・深さ0.20mの楕円形の土坑、埋土は黒色粘質土で縄文土器（晩期後半）が出土。	
	T6	縄文土器・須恵器・土師器をそれぞれ包含する土層を確認、いずれも少量。		⑤
H2		標高81.5～81.8mに堆積する厚さ5～20cmの灰色砂混茶褐色腐植土が後期後半～晩期初頭の土器と木製品（丸木舟）を包含。		⑥
H3		標高81.5～82.2mに堆積する厚さ5～20cmの灰色砂混茶褐色腐植土が縄文土器・木製品(丸木舟)を包含。		⑦
S61	T1	遺構は緩斜面上の標高83.5m以上で検出。後・晩期の丸木舟の出土標高と同じため、この高さが旧内湖の汀線か?。主な遺構に縄文時代晩期後半の土器棺墓6基(SX)とその周囲の土壙墓?12基(SK)。土器棺墓はいずれもかなりの削平をうけて残存状態は不良。旧内湖部分に堆積する茶褐色腐植土（灰色砂混）の一部と黒色粘土の一部は土器・木製品(丸木舟など)を包含、とくにその境界あたりで出土量が多い。縄文時代中期中葉～晩期前葉の土器が混在し(とくに後期中葉～後期後葉が中心)、少量の弥生土器が混じる。		⑧
		SX1	1.1m×0.75m・深さ11cmの二段掘りの不定形土坑、土器棺を横位に検出。	
		SX2	直径0.5m・深さ7cmの円形土坑、土器棺を検出。	
		SX3	0.7m×0.6m・深さ8cmの楕円形土坑、土器棺を検出。	
		SX4	0.6m×0.5m・深さ11cmの二段掘りの楕円形土坑、土器棺を直立して検出。	
		SX5	直径0.55m・深さ20cmの土坑、東の掘りかたを欠き、土器棺を斜位に検出。	
		SX6	（記述無し）	
		SK1	直径0.68m・深さ35cmの円形土坑、縄文土器出土。	
		SK2	直径0.84m・深さ21cmの三段掘りの円形土坑で、石材3点出土、下層に炭と焼土が堆積。	
		SK3	1.08m×0.9m・深さ20cmの楕円形土坑、石鏃出土。	
		SK4	1.06m×0.84m・深さ最大13cmの楕円形土坑、縄文土器出土。	
		SK5	1.7m×1.18m・深さ27cmの楕円形土坑、縄文土器・石材出土。	
		SK6	1.6m×0.76m・深さ27cmの長楕円形土坑、縄文土器出土。	
		SK8	直径1.14m・深さ17cmの円形土坑、縄文土器出土。	
		SK9	直径1m・深さ17cmの円形土坑、縄文土器出土。	
		SK10	1.4m×1m・深さ10cmの不定形土坑、縄文土器出土。	
		SK11	1.46m×1.2m・深さ20cmの楕円形土坑、縄文土器出土。	
		SK12	0.9m×0.67mの卵型土坑、縄文土器出土。	
第2次調査				
H12-14	A2区	晩期末～弥生時代前期初頭の竪穴住居SB09を検出したほか、後世の遺構などから石器（磨製石斧・サヌカイト石核・磨石類）が出土。		⑨
		SB09	3.3m×2.8m・深さ最大0.4mの不整隅丸方形、中央部に直径0.6mの炉跡を持つ。埋土から晩期末凸帯文土器（在地系・東海系）と弥生前期土器が出土。	
第3次調査				
H18 H20	第2区	早期後葉～前期前葉の集石土坑2基や土坑10基・小穴約200基を検出。そのほか基盤層上の黒色砂礫土などから縄文土器約90点（早期後葉～前期前葉・中期中葉中心）、石器22点（磨製石斧・チャート石核・サヌカイト石核・石錘等）が出土。		⑩
		SK107	1.25m×1.1m・深さ最大0.5m、埋土に約660点の礫。年代測定で前期前葉頃の測定値。	
		SK233	1.2m×0.9m・深さ最大0.1m、埋土に約50点の礫。年代測定で早期末頃の測定値。	
		SK207	直径1.1mの円形土坑、出土遺物はないが埋土から早期後葉～前期前葉の所産か。	
H20	第4区	晩期末の集石土坑1基のほか、後世の遺構などから縄文土器や石器5点(磨製石斧等)が出土。		⑪
		SK90	1.4m×0.9m・深さ最大0.25m、埋土に礫多数を含む。年代測定で晩期末頃の測定値。	
第4次調査				
H24	T2・T4・T5	後世の遺構から縄文土器（後期中葉）・石器（有舌尖頭器・楔形石器・磨製石斧・磨石類等）が出土。有舌尖頭器は県内初出となる流紋岩製。		⑫

※年度のSは昭和、Hは平成を示す。

土器と木製品が包含されていた。検出遺構はない。

実測・掲載された縄文土器は、挿図図版19枚に121点である。後期前葉：中津式が１点あるほかは、後期中葉：北白川上層式３期・元住吉山Ⅰ式などが25点、後期後葉：元住吉山Ⅱ式や宮滝式などが56点である。

石器は、石錘などが４点実測・掲載されている。木製品は、遺構図に丸木舟と思われる木片２点が示されている。

平成３年度：平成２年度調査区の東に隣接して調査区を設定している（⑦）。遺構検出状況は平成２年度とほぼ同じで、標高81.5～82.2mに厚さ５～20cmの灰色砂混茶褐色腐植土が堆積し、縄文土器と丸木舟を包含していた。

実測・掲載された縄文土器は、挿図図版10枚に66点である。中期後葉：北白川Ｃ式が３点、後期中葉：北白川上層式３期・元住吉山Ⅰ式などが５点、後期後葉：元住吉山Ⅱ式や宮滝式などが19点、晩期前半：滋賀里Ⅱ式・Ⅲａ式が12点、晩期後半の篠原式・凸帯文土器が10点である。このほかに時期比定困難な無文土器がある。平成２年度調査区と同じ遺物包含層だが、晩期の土器まで含んでいて、時期幅が広い。本調査区のほうが平成２年度調査区よりもおおむね標高が高く、時期による汀線の変化が遺物の堆積時期に影響を与えている可能性も考えられる。木製品は遺構図に丸木舟と思われる木片２点が示されている。

第１次調査のまとめ：小丘陵の西側では、３調査区（①～③）で遺物包含層が検出されているが、中期中葉・後期中葉・晩期後半の土器が少量出土しているのみである。ただし、御子柴系石斧の出土は、県内で唯一の例である。

小丘陵の南側では、５調査区（④～⑧）で遺物包含層を、さらにそのうちの２調査区（④・⑧）で遺構が検出されている。遺物包含層からは、早期後葉～晩期後半の縄文土器・石器と丸木舟10艘が出土している。ただし、縄文土器は、後期中葉（北白川上層式３期）～後期後葉（宮滝式）と晩期後半（凸帯文土器）が主体であり、そのほかの時期のものは出土点数が少ない。遺構には、土器棺墓６基と土壙墓の可能性を持つ土坑15基がある。これらは少なくとも晩期の所産と考えられるが、土器棺墓および土坑の一部はより限定して、晩期後半：凸帯文土器段階と時期比定することができる。また、これらの遺物包含層については、腐植土を主体とすることから、内湖岸に生えるヨシなどの有機質が堆積して形成されたと思われる。

(2) 第２次調査の概要（図５）

第２次調査の成果として、１冊の調査報告書が刊行されている（横田・小島2006）。遺跡範囲の南側で２箇所の調査区を設定していて、縄文時代の遺構・遺物が出土したのは、南側に位置するＡ区の東側であるＡ２区である（⑨）。この部分の地形は、佐和山丘陵西麓の緩斜面地である。第２次調査以降も、縄文時代の遺構・遺物を検出した内容について、第１次調査同様に要約して表１にまとめた。

遺構には竪穴住居１棟（SB09）がある。平面形は不整隅丸方形を呈して、中央部に焼土を含む炉跡を持つ。埋土からは整理用コンテナ２箱分の土器が出土したが、一括性が高いうえ、３系統に分けられる。１つ目は晩期後半：凸帯文土器の長原式最終末に位置づけられるもので、在地系とすることができる（１・２）。２つ目は弥生土器であり、弥生時代前期中段階に位置づけられる（３・４）。３つ目はこれらと同時期の東海系条痕文土器の樫王式土器である（５）。これらの出土土器から判断するに、本遺構は縄文時代から弥生時代にかけての移行期の所産と理解することができる。

このほか、後世の遺構などから石器（磨製石斧・サヌカイト石核・磨石類）も出土している。供伴土器がなく時期比定は困難だが、竪穴住居の時期から、晩期後半～弥生時代前期中段階のものとして考えておきたい。

Ａ２区は今回検討した調査区の中では単独で南に位置し、第１次調査で縄文時代の遺構・遺物を検出した各調査区（④・⑥・⑦）とは直線で約170m離れている。

(3) 第３次調査の概要（図５）

第３次調査の成果として、１冊の調査報告書を刊行した（小島・瀬口ほか2011）。遺跡範囲北東部で４箇所の調査区を設定していて、縄文時代の遺構・遺物が出土したのは、第２調査区・第４調査区である（⑩・⑪）。これらの地形は、佐和山丘陵西麓の緩斜面地である。

第２調査区では、集石土坑２基や土坑10基・小穴約200基などの遺構を検出した。そのほか遺物包含層：黒色砂礫土などから、縄文土器約90点や石器22点（磨製石斧・チャート石核・サヌカイト石核・石錘等）が出土した。縄文土器はいずれも小片であったが、その時期は、早期後葉～前期前葉および中期中葉を中心とする。

集石土坑SK107は埋土に約660点の礫を、集石土坑SK233は埋土に約50点の礫を、それぞれ含んでいた。どちらも遺物は出土していないが、埋土に含まれていた炭化物を放射性炭素同位法により年代測定した結果、SK107は前期前葉頃（約5,800年前）、SK233は早期末頃（約6,900年前）の測定値をそれぞれ得ている。これらの集石土坑の周囲では、住居跡の可能性を持つ小穴も多数検出されているほか、少数だが早期後葉の貝殻条痕文系土器（鵜ヶ島台式～塩屋式）や前期前葉の羽島下層Ⅱ式・木島式土器などが出土していて、当該期に利用されていたと考えられる。

第４調査区では、集石土坑１基（SK90）を検出した。縄文土器は出土しなかったが、埋土の炭化物を放射性炭素同位法により年代測定した結果、晩期末頃（約2,500年前）の測定値を得ている。そのほか、後世の遺構などから縄文土器２点や石器５点（磨製石斧等）が出土している。

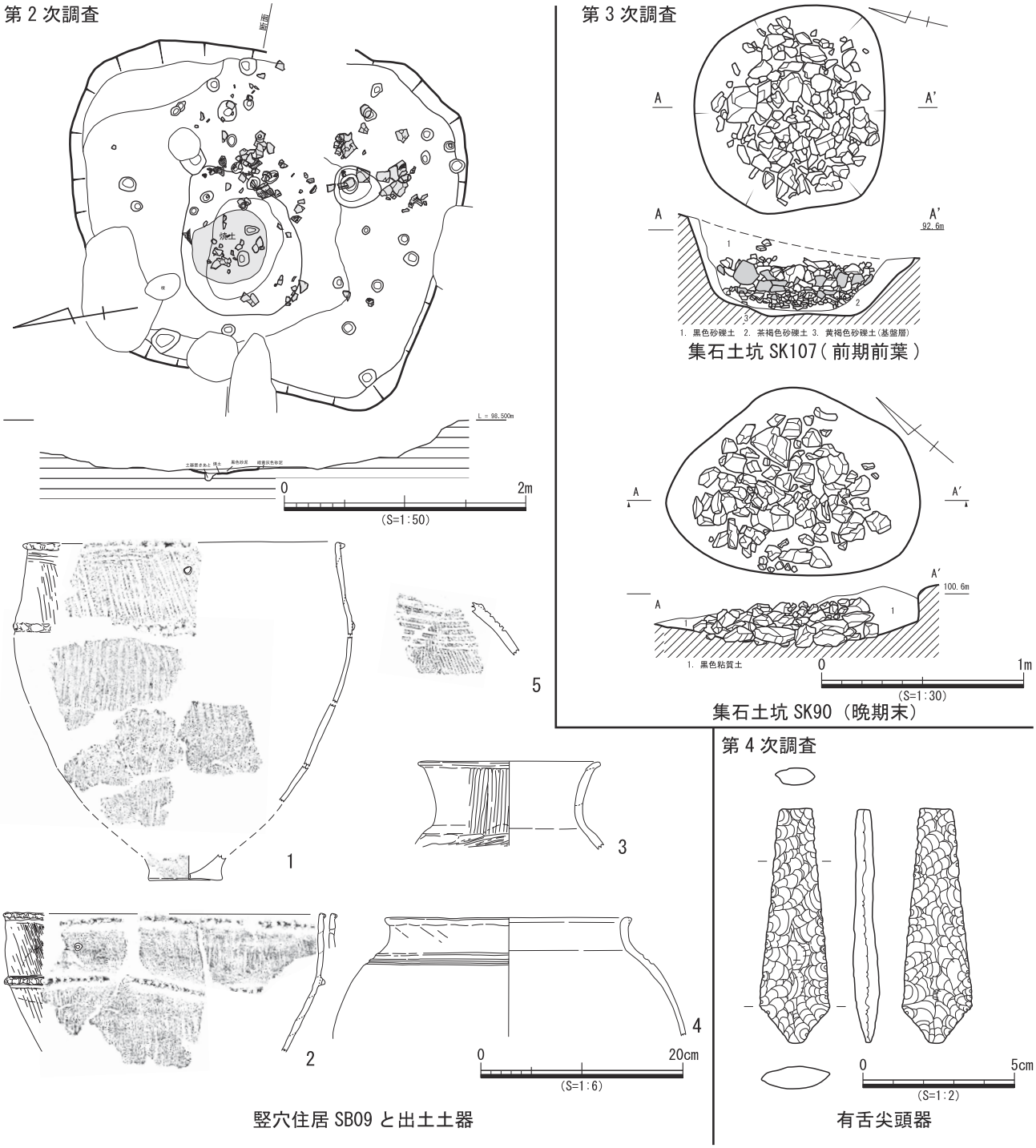


図 5. 松原内湖遺跡第 2 次～第 4 次調査における主な縄文時代の遺構・遺物

表 2. 松原内湖遺跡周辺の縄文時代遺跡の消長

No.	遺跡名	旧石器・縄文草創期	縄文早期			縄文前期			縄文中期			縄文後期			縄文晩期前半	縄文晩期後半・弥生前期前半	特記事項（祭祀・希少搬入品など）
			前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後			
1	世継遺跡														○		
2	筑摩佃遺跡				○				○	○	○			○	○		土偶・黒曜石
3	大乾古墳群	○															
4	立花遺跡										○					○	
5	磯湖底遺跡						○										
6	磯山城遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	石棒・黒曜石
7	入江内湖遺跡				○	○	○	○	○	○	○	○				○	石棒・けつ状耳飾
8	入江内湖西野遺跡												○	○			
9	矢倉川遺跡																（詳細不明）
10	六反田遺跡	○									○	○	○	○	○	○	土偶・石棒・黒曜石・翡翠
11	松原内湖遺跡	○			○	○				○	○	○	○	○	○	○	石棒・黒曜石

（瀬口 2000・同 2013 を基に新たな調査成果を追加して作成）

(4) 第４次調査の概要（図５）

第４次調査の成果として、１冊の調査報告書が刊行されている（鈴木2015）。遺跡範囲北東部の佐和山丘陵西麓の斜面地に調査区を設定していて、第３次調査第４調査区（⑪）の北側に位置する。縄文時代の遺物が出土したのは、このうちのＴ２・Ｔ３・Ｔ４である（⑫）。

後世の遺構から縄文土器の小片２点（後期中葉）と石器（有舌尖頭器・楔形石器・磨製石斧・磨石類等）８点が出土した。このうち、有舌尖頭器は素材に流紋岩を用いている。滋賀県内で流紋岩製の有舌尖頭器は初めてである。

以上の各調査成果を踏まえて、次章では５時期に分けて、松原内湖遺跡の縄文時代を見ていくこととしたい。

４．時期別にみた松原内湖遺跡の縄文時代各調査の内容

(1) 草創期

遊離資料ではあるが、当該期の所産と考えられる石器２例が出土している。１例目は第１次調査で出土した御子柴系局部磨製石斧２点である（①・②）。２例目は、第４次調査で出土した有舌尖頭器である（⑫）。（加藤2014）によれば、滋賀県内では37遺跡から40点の有舌尖頭器が出土していて、石材ではチャート（19点・47.5％）とサヌカイト（14点・35.0％）の２種で大半を占める。本例は石材に流紋岩を用いているが、流紋岩（加藤は凝灰岩と記述）製の有舌尖頭器は東海圏で出土している。したがって、搬入品の可能性があるが、滋賀県内にもその露頭があるため、地元産の可能性も残るようである。これら草創期の石器の出土は、当該期に活動の端緒があるものとして認識できる。

(2) 早期後葉～前期前葉

当該期の遺構には、第３次調査の⑩で検出した集石土坑２基があり、年代測定の結果、早期末頃（約6,900年前）と前期前葉頃（約5,800年前）の測定値を得ている。周囲では同時期の土器も少数出土している。そのほかの調査区で当該期の資料が出土したのは、集石土坑の南約100ｍに位置する、第１次調査の⑧だけである。よって、当該期の活動は限られた範囲で行われていたようである。なお、続く前期中葉～中期前葉の資料は、確認されていない。

(3) 中期中葉～後期前葉

遺構は検出されていないが、縄文土器が第１次調査の各調査区（①～⑧）と第３次調査の⑩で散見される。中期中葉のものは小片が多いが、中期後葉（北白川Ｃ式）～後期前葉（中津式～縁帯文土器成立期）のものは、第１次調査の⑦・⑧で文様構成の判明する大破片も出土している。当該期の活動がこれらの内湖岸で行われた可能性がある。

(4) 後期中葉～晩期前半

当該期の遺物が第１次調査の④・⑥～⑧で出土しているが、出土点数が格段に多い点で前段階と異なる。特に後期中葉（北白川上層式３期）～後期後葉（宮滝式）の出土量が多く、本遺跡において集落が形成されるなど、活発な活動が行われたと推測される。ただし、遺構は検出されていない。一方で、丸木舟10艘の出土は、供伴出土土器が限定できないことから後期・晩期と幅をもって時期比定されているものの、湖上交通や漁労活動を積極的に行っていた証拠となろう。なお、晩期前半の資料は比較的少なく、松原内湖岸での活動はいったん下火になると考えられる。

(5) 晩期後半～弥生時代前期

晩期後半（凸帯文土器期）の遺構は、第１次調査の④・⑧で土器棺墓・土坑（土壙墓?）21基、第２次調査の⑪で竪穴住居１基、第３次調査の⑨で集石土坑１基が、それぞれ検出されている。そのほか、第１次調査の④を中心に、遺物包含層からも多数の遺物が出土している。これらの状況から見れば、本遺跡において集落や墓域が形成されるなど、再び活発な活動が行われた段階と考えられる。ただし、遺跡範囲南部に位置する竪穴住居は、土器棺墓・土坑などの北半部の各遺構とは離れているため、別集団の存在あるいは短期的な時期差を想定する必要があるかもしれない。この竪穴住居は、前述のとおり、縄文時代から弥生時代にかけての移行期の所産として注目される。

５．周辺遺跡との比較（図２）

以上のように、松原内湖遺跡では、後期前葉まではそれほど多くの活動痕跡は認められないが、後期中葉～同後葉と晩期後半に多くの資料が認められる。

松原内湖遺跡の周辺で縄文時代の遺構・遺物が見つかっている遺跡は、図２・表２に示したように、北側に10遺跡あり、うち９遺跡は米原市に所在する。彦根市に所在する六反田遺跡も、現米原市域と同じ旧坂田郡に所在することからもわかるように、地形的には、入江内湖に向かって傾斜する沖積平地に立地する。松原内湖遺跡の南側では、近接地で縄文時代遺跡は確認できない。

松原内湖遺跡を含むこれらの遺跡が立地するのは、琵琶湖の内湖（松原内湖・入江内湖）と丘陵（伊吹山地・佐和山丘陵）が接する地形である。滋賀県域でこのように水域と丘陵が接する地形は、縄文時代早期から居住地として選択されることが多い。これは、湖の幸と山の幸の両方を得やすいという、食糧獲得を主たる目的としたものと考えられる。典型例が、本稿で扱う松原内湖・入江内湖一帯であり、そのほかに近江八幡市弁天島遺跡や竜ヶ崎Ａ遺跡などが立地する大中の湖・小中の湖周辺地域と、大津市石山貝塚や粟津湖底遺跡などが立地する瀬田川流出口がある。

さて、先に挙げた10遺跡のうち、発掘調査が行われて縄

文時代の資料について大きな成果が上がっているのは、2.筑摩佃遺跡・6.磯山城遺跡・7.入江内湖遺跡・10.六反田遺跡である。これらを中心に、松原内湖遺跡で活動痕跡が見られた各時期の様相と比較して以下に述べていく。

草創期：3.大乾古墳群遺跡と10.六反田遺跡で石器が出土している。六反田遺跡のものはチャート製有舌尖頭器である。いずれも、松原内湖遺跡同様に遊離資料である。

早期後葉～前期前葉：6.磯山城遺跡で遺物包含層から早期前葉～晩期後半の遺物が出土している（中井1986）。特に多いのが早期後葉の土器であり、２体の埋葬人骨もこの段階のものと考えられている。また、7.入江内湖遺跡でも、内湖底に堆積した腐植土層から前期前葉～後期前葉の遺物が出土しているが、とくに多いのが前期前葉・同後葉である。北陸地方から搬入されたけつ状耳飾も出土している。松原内湖遺跡では、遺構の検出はあるものの、これらと比較すると遺物量も少なく、集落の形成は考えにくい。

この後の中期前葉は、松原内湖では資料の検出は認められないが、2.筑摩佃遺跡で遺物包含層からの多量の遺物が出土している。北陸地方から搬入された土偶もある。

中期中葉～後期前葉：10.六反田遺跡の平成19年度調査で、中期後葉～後期前葉の遺構が検出されている（堀2013）。後期前葉の埋設土器３基を検出していて、うち１基からは骨片とともに黒曜石片が出土している。同調査では自然河道跡から、縁帯文土器成立期～後期中葉：北白川上層式３期の資料もまとまって出土している。

後期中葉～晩期前半：10.六反田遺跡の平成20年度調査で、後期後葉～晩期前葉の20基以上の貯蔵穴が検出されている（瀬口2013）。低湿地型の貯蔵穴であり、一部は直径１ｍを超える大型サイズのものである。埋土からは取りこぼされた堅果類のほか、土偶（後期後葉）も出土している。安定した集落が営まれていたと考えられる。松原内湖遺跡では、遺物量からすれば集落の形成を想定するべきだが、明確な遺構が認められない。

晩期後半～弥生時代前期：同じく六反田遺跡の平成20年度調査で、滋賀里Ⅲｂ式期の土器棺墓７基も検出されていて、墓域と想定される。一方、続く時期の凸帯文土器は、複数の遺跡で出土しているが、いずれも遺構の検出は認められない。一方で、松原内湖遺跡では墓域や居住施設が確認されていることから、この地域で最も主体的に活動がなされていたと考えることができる。

６．おわりに

周辺の遺跡の動向からは、6.磯山城遺跡や7.入江内湖遺跡を中心に、早期から晩期にいたる長期的な活動痕跡が認められることを改めて確認した。松原内湖遺跡は、断続的ではあるが、これらと同程度の期間の活動痕跡が認められるものの、遺物量から後期中葉以降に活発な利用がなされたとみられる。松原内湖遺跡と似た傾向を示すのが、10.六反田遺跡である。中期後葉以降の遺構が断続的に残され、居住を示す貯蔵穴や墓域が確認される。両遺跡は佐和山丘陵を挟んで東西方向に約１km離れて位置しているが、密接な関係性を有していたことが想定される。

挿図典拠

図１～３　小島作成

図４　吉田・小島1993

図５　横田・小島2006、小島・瀬口ほか2011、鈴木2015

文献（著者名・機関名50音順、刊行年順、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会は県教委・県協会と省略した）

松原内湖遺跡の発掘調査報告書ほか

吉田秀則ほか（1992）『琵琶湖流域下水道彦根長浜処理区東北部浄化センター建設に伴う　松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅱ（木製品）』県教委・県協会

吉田秀則・小島孝修ほか（1993）『琵琶湖流域下水道彦根長浜処理区東北部浄化センター建設に伴う　松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』県教委・県協会

横田洋三・小島孝修（2006）『琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う発掘調査報告書　松原内湖遺跡』県教委・県協会

小島孝修・瀬口眞司ほか（2011）『琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う発掘調査報告書Ⅱ　松原内湖遺跡Ⅱ』県教委・県協会

鈴木康二（2015）『琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う発掘調査報告書Ⅲ　松原内湖遺跡Ⅲ』県教委・県協会

鈴木康二（2010）「琵琶湖周辺における旧石器時代研究の現状と課題」『人間文化』第26号　滋賀県立大学人間文化学科

加藤達夫（2014）「滋賀県の有舌尖頭器―松原内湖遺跡出土事例をてがかりにして―」『紀要』第27号　県協会

六反田遺跡の発掘調査報告書

堀真人（2013）『中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書３-１　六反田遺跡Ⅰ』県教委・県協会

瀬口眞司（2013）『中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書３-２　六反田遺跡Ⅱ』県教委・県協会

入江内湖遺跡のおもな発掘調査報告書

瀬口眞司ほか（2007）『一般国道８号線米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書１　入江内湖遺跡Ⅰ』県教委・県協会

瀬口眞司ほか（2008）『一般国道８号線米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書２　入江内湖遺跡Ⅱ』県教委・県協会

小島孝修（2015）『一般国道８号線米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書３　入江内湖遺跡Ⅲ』県教委・県協会

磯山城遺跡・筑摩佃遺跡の発掘調査報告書

中井均（1986）『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　磯山城遺跡』米原町教育委員会

そのほか

瀬口眞司2000「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き―地域の検討5.湖北地域―」『紀要』第13号　県協会

滋賀県教育委員会（2017）『平成28年度　滋賀県遺跡地図』

（こじま　たかのぶ：調査課　副主幹）

平成31年（2019） 3月31日

紀　要　第32号

編集・発行：**公益財団法人滋賀県文化財保護協会**
520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
（TEL）077-548-9780／（FAX）077-543-1525
e-mail：mail@shiga-bunkazai.jp
http://www.shiga-bunkazai.jp/
印刷・製本：（株）図書印刷同朋舎